第四十三年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十九年三月二十七日印刷納本
昭和十九年四月一日發行（毎月一回一日發行）

第五百八十九號

一統

第四十九年四月臨戰號

佛眼を借りて時機を考へよ

今末法に入て二百餘歳、大集經の『我が法の中に於て鬪諍言訟白法隱沒の時に當れり。佛語實ならば定めて一閻浮提に鬪諍起るべき時節なり。……鬪諍堅固の佛語地に墮ちず、宛かも是れ大海の潮の時を違へざるが如し。是を以て按ずるに、大集經の白法隱沒の時に文で、法華經の大白法の日本國並に一閻浮提に廣宣流布せん事も疑ふべからざるか。

後の大集經は佛說の中の糟大乘ぞかし。生死を離るる道には、法華經の結緣なき者の爲には未顯眞實なれども、六道四生三世の事を記し給ひけるは寸分も違はざりけるにや。何に況や法華經は、釋尊『要當說眞實』と名乘らせ給ひ、多寶佛は眞實なりと御判を添へ、十方の諸佛は廣長舌を梵天に付けて誠諦と指示し、釋尊は重ねて無虛妄の舌を色究竟に付けさせ給ひて、後五百歳に一切の佛法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華經の五字を持たしめて、諸法一閻提の白癩病の輩の良藥とせんと、梵帝日月四天龍神等に仰せつけられし金言、虛妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頹落すとも、春の後に夏は來らずとも、日は東へ歸るとも、月は地に落つるとも、此事は一定なるべし。

鉄明より當奇に至るまで七百餘年、未だ聞かず、未だ見ず、南無妙法蓮華經と唱へよと他人を勸め、我と唱へたる智人なし。日出でぬれば星隱る、賢王來れば愚王滅ぶ、實經流布せば權經の止まり、智人南無妙法蓮華經と唱へば、愚人の此に隨はんこと、影と身と、聲と響との如くならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事敢て疑ひなし、これを以て推せよ、漢土月氏にも、一閻浮提の內にも肩を並ぶる者はあるべからず。

悅ばしきかなや、樂いかなや、不肖の身として今度心田に佛種を植えたることよ。南無妙法蓮華經。

——日蓮聖人、撰時鈔——

日蓮聖人の慈訓

本多日生

三、器の四失

『秋元鈔』といふ日蓮聖人の御書に信心の事に就ていろ〳〵懇切なる聖訓があつて、器に譬へて、信心に四つの失のあることをお示しになつて居る。器が覆へる場合、或は漏る場合、汚れる場合、雜り物のある場合に於てはその用を成さないやうなものである。この器といふものはお互ひ人間の心なり身なりを譬へるのであるが、佛の結構な教に出會つても耳に蓋をしてこれを聞かないとか、信心しないとかいふのは、器が覆つて居るやうなものである。幾ら水を注がうとしてもコップが俯きになつて居れば水は入らないが如くその人の心が覆つて居るものである。或は一旦信じても惡緣に出會つて、誰かゞ佛教の惡口を言つたとか、信心を嘲つたとかいふことの爲に、その人の心弱くしてそれを鄙つやうなことになり、或は何とはなしに世間の俗事に心を奪はれて、信ずる日もあるけれども忘れる月があるといふやうな譯で、一日信じて一ヶ月忘れるといふやうなことから、次第々々に氣が抜けて行くやうな信者は、器の何處かに孔が穿いて居つて、一旦入れた水が漏つて行くやうなものである。又法華經の信心をしながら他の信仰を混ぜるといふものは、それはちようど飯の中に砂を入れたり石を混ぜたりするやうな汚れたものであつて、洵に悲しむべき事である。世間一般の人は何でも御利益のありさうな事をいろ〳〵やるのが宜いやうに思つて居るけれども、信仰はさういふものではない。恰も王様のお妃が王様の嵐を宿して居られる場合に、或る臣下と交りをしたならば、王の嵐か臣の嵐かわからなくなつて天にも見捨てられるやうなものである。父二人あらば王にもあらず民にもあらず、人非人である。その知くに法華經の大事といふのはこの點である。本佛釋尊を信じたる者は、その中心の信仰といふものを動搖せしむべきものではない。それを動搖させていろ〳〵のものを信じたりするのは、御飯に砂を混ぜるお知きものである。斯樣に「覆」と「漏」と「汚」と「雜」といふ四つの失を免れて、始めて正しき信仰といふことが言へると仰せられて居る。これは有名な秋元鈔の慈訓であつて、所謂法華氣質といふものはこの四つの譬の中から出來て居るのである。

又『日妙鈔』といふ御遺文に結構なお示しがある。この日妙といふのは乙御前といふ可愛い娘の母親で、佐渡ヶ島まで日蓮聖人御流罪中にお見舞に行つた婦人である。男の人はまだ誰もお訪ねしないのに、この乙御前の母は態々鎌倉から十四歳の娘を伴れて佐渡ヶ島に、日蓮聖人がどういふ風にお暮しになつて居るか、氣になつて仕方がないといふので訪ねて行つた。日蓮聖人はその志を非常に賞せられて、日妙といふ聖人號を贈られた有名な婦人である。これが後に富木常胤守の妻となられたのであつて、六老僧の日頂上人の母親に當るのである。今自分の住職して居る品川の妙國寺は妙國尼といふ方が建てた寺であるが、この妙國尼のやはり母親に當る、その日妙女に與へられた日妙鈔といふ御書に婦人の事に就ていろ〳〵教へられて居る。一通り女の心といふものは頼りにならぬものだといふことがいろ〳〵の書物に書かれて居る、女の心は水の上に字を書くやうなものであつて、直ぐに消えてしまふとか、女は狂人じみたもので或る時は實のやうだけれども、或る時は嘘である。或は女の心は川のやうなもので、山から海まで眞直に流れて居る川は無い、その如くに女の心は曲つて居るとかいふやうなことは普通世間で言ふのだけれども、この法華經は正直なお經であり、柔和なお經であつて、法華經を信ずる女人はこれと異なる、（そこが婦人の最も強く感じなければならぬ所である）法華經は正直なること弓の弦を張りしが如く眞直である。他のお經は結構だけれども、法華經から見たならば足らざる所がある。然るに今あなたは法華經を信ずることになつた。全く正直な人であり、眞實の女人である。須彌山といふ大きな山を小脇に抱へて海を渡る人はあつても、あなたのやうな尊き女人は無い、定めし鬼子母神始め諸天善神も、影の身に添ふが如くにあなたをお守護爲さつて居るだらう。あなたこそは日本第一の法華經の行者の女人であるといふことが言へる。それ故に不動菩薩がすべての人は皆菩薩なりと言つた意味から考へて、あなたは女人であつてまだ髪も剃つて居ないけれども、佛し日妙聖人といふ尊號を贈りたいと言はれた。この人は有髪の儘聖人號を與へられて、その後に富木常胤守の所に緣入つた譯である。さういふ風にこれからお緣に行かうといふやうな人に日妙聖人といふ尊號を贈られた。日蓮聖人はさういふやうな形式の如何を問はずして、普通の女であるにも拘らず法華經の信仰强くして、日蓮聖人を佐渡ヶ島に訪ね行かれたその志が微既して居ることに對して感激を以てこの名前を贈られたのである。この世間一般の女は曲れる河の如しとか、狂へる人の如しとか言はれて居ることを切棄てゝ、正直なること弓の弦の如しといふ風に法華經の行者たる女人を讃められて居ることを深く心に銘じて、法華經を信ずる女人は最も強く正しき信仰を貫い行てきたいものと思ふのである。

× × × × ×

國と教

小林一郎

お釋迦樣のお考に依れば、たとへ天上界の安樂な生活をして居るからといつて、それが決して幸福ではない。これもいつかも申したのでありますが、人間は用が多いから世の中の用のないのを望むし、苦勞が多いから苦勞のないのを望むけれども、苦勞もなく、仕事もなくボンヤリして居つたら、そんなつまらないことはない。何か用が欲しいと思ふのが當り前である。だから天上界の生活といふものは、決して人間の理想的の生活ではない。本當に世の爲め、人の爲に滿足を感ずるといふのが生き甲斐のある生き方で、たゞ無事泰平を望むといふことが本當の生き方ではないといふことを佛教では強く言はれた。それから人間界ばかりではない。天上界の神でも佛の教を學ばなければならんといふ思想が發展して來たのであります。それが經典の中に言葉になつて現はれて來たのであります。人間が佛の教を守れば、天上界の者もこれを護る。一緒に助力をする。人間が佛の教を守らないならば、天上界の神も見捨てゝしまつて護りはしない。モット進んで強く言へば、人間の目を醒ましさせる爲にそれに鞭ひを下して、これを覺醒させることもあるといふやうな思想は非常に大きい思想であります。即ち天地の間にある命のある者は皆教を守らなければならないといふことなのです。たゞ安樂な生活といふものがチットモ理想的な生活でもなんでもないといふことを教へられて居るものであります。だから金光明經中に四天王が、モウさういふ佛教の行はれないやうな國は護らない。自分達も見放してしまふぞといふことを言つて居るのであります。

またこれもつけたりのことかも知れませんが、少し奇怪な、滑稽な話もあるのであります。印度の昔の言ひ傳へですが、持國天增長天等が、この人間界を見て歩いて、人間の善い惡いを見分けて帝釋天に報告をする。さうすると、帝釋天がその報告に依つて或る者には幸ひを與へたり、或る者には鞭ひを下したりするといふことが信じられて居つた。無論佛教以前の話であります。ところが四人の天王が始終廻つて歩くのではなくて、時々廻つて歩くのです。何を本にして決めたのか分りませんけれども、一日と、十五日と、二十八日に廻るといふのです。この三日を特別な日にしてしまつた。その日は見に來られるのであるから、成るべく見つともないことをしないやうにといふわけです。さういふマアつまらない思想で、見られる時だけ慎んで、平生はどうでもいゝといふのでは困るけれども、マア人間の習はしで、そんな思想が發展して來たのです。それで一日、十五日、二十八日は成るべく行ひを慎むといふことになつた。それが支那に傳はつて、日本にも傳はつた。日本では今はさうでもないが、吾々が子供の頃はお三日と言つて、一日、十五日、二十八日は特別の日になつて居つた例へば商人の店などで、ドンナ客な主人でも、お三日だけはひじきに油あげだけでなく鳥ぐらゐは食はせる。さうすると、あの主人は慈悲がある。情深い人であると見られて、大いに儲かるであらうといふやうなドウも都合の好い話でありますが、お三日と言つて特別の日になつて居つた。この頃ではなくなつたが、妙に國の風俗習慣といふものがドウモ古いことに緣を持つて居るといふことがこの一例でも分るのであります。だから一度善い事をしたならば、その惡い事はやはり消えるものではなし、一度惡い事をしたらそれは消えるものではなし、いつの間にか後の世までも何等かの影響を及ぼすものだといふことを考へるのであります。さういふわけでありまして、今の四天王といふことも、印度ばかりでなく、支那、日本に亙つても隨分考へられて居るのであります。その四天王が佛教の弘まらない國は見放すぞといふのであります。

それから『棄叉』といふのは、これはもとは空を飛び廻つて人間に害を爲したもので、惡魔のやうなものであるけれども、これが佛教を信じて、佛に歸依して、佛の教の弘まることを護るやうになつたといふので、その棄叉なども佛教の弘まらない國はこれを捨てゝ『擁護の心無けん』即ちこれを護らない。たゞ『我等のみ』が佛教を信じない爲政者を捨てるのみならず、無量のその國を護るところの善神もやはり捨てるであらう、皆悉くが捨て去るであらう。その國々には特別に國を護る神といふものがあるが、その國を護る神も爲政者が心掛けが間違つて居つては、政治が間違つて來る。隨て人民の風儀も亂れて來るといふことで、見込がないからそこを捨てゝしまふであらう。その神さへも捨てるやうな狀態であるならば、その國に種々の災難があつて、結局主權者はその地位を失ふやうにもなるであらう。それで一切の人間が皆『善心』がなくなるから、そこで『繫縛・殺害・鬪諍』即ち互に人に害を與へたり人を損ね合つたり、殺し合つたり、或は相爭ふといふやうなことになつて來て『互ひに相讒謗し』ほかの者の惡口を言つて、ほかの者を陷れるやうになると、『枉げて無辜に及ぼん』で、罪の無い者までも惡道へを食つていろ〳〵な災難に遭ふやうになるであらう。またさういふ時代に於ては疫病が流行つたり、彗星がたび〳〵出たり、太陽が二つ並んで出たり、或は太陽や月が薄くなつて、日蝕や月蝕があつたり、黑い色や白い色の虹が出て世の中が亂れて行く姿を現はし、星は流れ、地が動き、地震がある。或は井戸の内には物の響きの聲が聞えたり、風も時節を構はず吹き荒れたりして、遂に時節といふものの區別が立たなくなつてしまふ。さういふ風に氣候が亂れるから飢饉も起つて苗も弱つて行く。隨て實も出來ないといふやうになる。國が斯ういふやうに弱つて來ると、その弱づたのに付け込んでほかの國の者が兵を起して、その國に攻込んで國内を侵略するといふやうなことになつて、人民はいろ〳〵な苦しみを受けるであらう。さうして何處でも樂しむべき所がなく、その國中が皆亂れ荒れて、人民は生活の安樂を保證されるといふことがないであらう。斯ういふことが金光明經の中に言つてある。これに依つて見ると、國に正しい教が行はれなければ天災地變があるといふことは明かである。その天災地變があつても、それでもまだ用心しないで居ると今度は他國が攻込んで來るといふことは、この經文の本文に基いて推測することが出來るといふことを日蓮聖人は叫んで居らるゝのであります。

本佛の宗教（綱要五）

河合陟明

一、諸宗の批判と開顯（承前）

今、如上、天台・華嚴・眞言はゆる天・華密三門を代表的なる學問佛教として概評するに天台は根源的實在論たる法性論においては典型的なる深遠精緻の認識と實踐を生み、たゞ建設的實在論たる佛陀論においては一大剩餘領域を殘したものである。但し法性論の發展が必然に佛陀論となり、法身論上の嚴密推理が必然的に報應二身の事成にして事常なる、かつしかも一大完結的統一體系としての本佛といふ實在概念に達せずんばやまざるものであるとするならば天台の法性論すらも亦未だ完璧とはいはれざるものなることを知るべきである。すべて思想批判には與奪二面が存することを知らねばならぬ之に反し、華嚴は法性の本質論上における具體的內容を審かにせず、根本實在の體系的組織すなはち無作本有の實在の論理的構造を明かにせず、とくに個性原理において不明を免れず、而して佛陀論上に來つてもまた勿論これがために不明混亂を脫せざるに至つたのである。いはゆる、問、唯心法界、以論レ幾、一念法界、以立行者、如何。答、是雖三高尚一未レ見二實相一也、以二界如常住、未レ顯故、以レ辯二唯識一相故、應二幻造無常空理一。（日輝、一念三千論、卷一）これすなはち華嚴および法相唯識等、別教但中ないし權大乘の性相二宗を破する的文である。（但しかく評破せる日輝もまたつひに眞の本佛を解せず、華嚴の二家と相去る遠からざるに終つた！）しからば眞言は如何。彼は法性論・心性論・本體論・本質論が直ちに佛陀論・多神論・價値論・現實論とみなされ、この根本的二面の別がもはやつひに喪失され、ブルンナーのいはゆる限界攝取を敢てして、超越と內在との雜種混血兒・畸形兒が生まるゝに至つたのである。彼にあつては二面共に全く混亂雜糅し果つるに至つた。

しかもこの偏をなせるものは他なし既に華嚴家にあつて存するのである。彼が佛陀の形而上的個性現象と眞如の形而上的實在とを、共にたゞ一箇の形而上的實在として、否もちろん其は共に形而上界に屬して形而上的實在なのではあるが、しかもまさしく兩者が共に形而上界に屬するがゆゑに、これを混亂し、否、とくに佛陀の個性的人格實在なることを知らざるがゆゑに混亂し、本體界としての眞如界と價値完成界としての佛界とを同置するに至り、したがつて眞如本體界上における、或はいはゆる眞如海中における個々多元の萬有現象、すなはち九界迷者の迷妄現象——何となれば華嚴家にあつては、本體は卽佛界なれば、現象は卽九界迷者たるの外はない筈である——を、然るにも拘らず遂に或は直ちに、盧舍那または毘盧遮那の果上現の現象なり、果上現の法門なり、如來性起の大用なり、極果の佛陀的作用としての價値的現象なりと見るに至り、然り見誤るに至つて、この眞如と佛陀との二面を媒介すべき必須過程としての因果法は、すこぶる意義稀薄となり、殆ど喪失されんとするに至つた。しかるに眞言家に至つては、つひにこの方向にさらに一歩、惡しき一歩を進めて——そも〳〵東西古今を通じて苟くも宗教思想の根本要求たる、然り萬古を貫いて人間本來の宗教的要請たる、神すなはち本佛の無始の人格實在といふことが、因果法を以てしては遂に有始たるを脫せず、眞實在の要求に適はざるの根本理由を以てして、換言すれば實在論上における眞にこの深き致命傷的眞理の問題、云く「實在と因果」といふ根本問題を徹底解決するを得ざりしがために——つひに一思ひに大膽に、否、侮若無人に、佛教の根本原則、否宇宙法界の大法則たる因果の理法を全く無視し蹂躪し否定し抹殺し去るに至つたのである。佛教の命脈はこゝにもはや斷絕せりといふの外はない。彼こそ實にその釋迦・大日二佛並立の說において、あまつさへその本末顚倒の說において、はたまた因果否定の思想において、倫理的にも論理的にも佛教混亂の元凶であるのである

ひるがへつて眼を轉じて實踐佛教の代表としての禪淨二門を見るときは果して如何。念佛門は依然として香學本來の問題たる實在論に關しとくに宗教の根本中心たる佛陀の實在性に關しすなはち彼が超世の悲願として誇る彌陀の佛體そのものに關し、その實在性を根本問題として積たへてゐる。それを實體と影現との問題といふべく而して結論は影現たるに過ぎぬ。何となれば彌陀の佛體もまた未だ嚴密なる完全實在としての意味を說明し得ず。その佛格は報身その實在は有始なる點においては、時間範疇上天台に屬し、その佛身の實在の樣式は無相にしてたゞ光明身のみといふ點においては、空間範疇上華嚴別教に屬し、その時間的有限性を免れんとして說ける十劫久遠・本師法王說は、六八の本願と常住の事理との因果關係を完全に說き得ざる點において眞言門に屬し、かくてその實體はつひに唯理無形の法性一如界に還元する外なきがゆゑに、彌陀とは結局假象的・影現的なるものに過ぎず、畢竟するに佛身觀上における權實論・本迹論の双に倒れ、傳教のいはゆる、有爲報佛、夢中權果、無作三身、覺前實佛といふ眞如絕對論中に滅沒して、また佛身の痕跡をも留めざるに終るのである。

南無妙法蓮華經。

團費誌料維持費及寄附金感謝入帳

（自二月二十一日至三月二十日）

○十圓　川島清藏殿○五圓　松本宮子殿○三圓　片桐德次郎殿○二圓二十錢　山田健治郎殿　○二圓五十錢　市川通源殿○五圓　伊藤和歌殿○二圓二十錢　坂上昭殿○二圓五十錢　橋本美芳殿　○十圓　高橋傳殿○二圓二十錢　坂井日好殿○三圓　宇野博順殿　○三十圓　柴田武治殿　○二圓二十錢　石黑政次郎殿○二圓二十錢　中村明法殿○二圓二十錢　川手海祥殿○十圓　松本祐一郎殿○一圓三十錢　本郷常信殿　○三圓　村田よし子殿○六圓　菊地雄三殿

團員總會

來る四月十六日午後一時半於本部團員總會を開催昭和十八年度事業並決算報告及び本年度豫算御協定願度候間御出席相成度右謹告仕候

財團法人　統一團

本部團報

○日蓮門下に於ける長老たる歴史を有せる我が統一誌は、過去五十年に亙つて本多學系により普く天下に純正日蓮法華の生粋正義を宣揚し國民教化に寄與する處あつたが今こそ更に一大飛躍を試みるべき時に際會したにも不拘、御周知の通り昨今頓に各方面の急轉につれ本誌三月號の如きも遲れて漸くお手許に屆く始末に鑑み、爰に潔く商業を脫して面目一新、臨戰版に改めて益々健闘することになりました。

○御存じの通り各誌の統合整備が强要されて居り、當方にも勸誘される機會が數々ありましたが、併し現在社上に眞淨の大法を護持宣揚し、折伏立行の聖意を體し、その思想信念を如實に敷衍し躬行してゐるものがありませうか。本誌は外觀こそ貧弱となつたが、此の純粹な法義擁護の大事に於て道念の合致するものが出現する迄は統一誌は統一として飽迄勇精すべきがお國のためだと思ふ。同感の各位、何卒信法國體の御清援を賜り上ます。

○三月五日午後、本部で幹部會を開いて二三の要件を協議致しました。

○三月十六日は、日生上人第十四周年忌に相當するので、午後於本部報恩會を捧修し終つて品川妙國寺のお墓に打揃つて參詣することを得たのは有難い次第であつた。ある人等は展墓を輕んずる傾向もあるが、これは觀門の難信難解で甚だ遺憾千萬に思ふ。お互ひ強盛に信行を勵んで後悔のないやうに致したいものであります。

○三月十九日より一週間、駿州掛川に於ける文部省教學局思想課主催の教化團體指導員錬成に本部より金城氏が參加されました。

○日曜、月曜及大詔奉戴日の清集に就ては事繁き故に省略させて戴きます。

○本多上人の誡徒、大法廣布のため本團に甚大な御清援を與へられつゝあつた小林一郎先生は昨冬より御加養中の處、藥石效を奏せず、遂に三月十八日六十九歲を一期として化を他土に遷されてしまひました。實に惜みても惜み切れない、玆に謹んで御冥福を祈る次第であります。南無妙法蓮華經

三月二十日も同前の如く清集をなす、春のお彼岸會に因んで、皆日行足到濟涼地だから是非大願力を志して菩薩行への精進を雖有聽聞した。當日は春雪霏々、而も多數の來會者あつたことを歡ぶ。

福島支部報

餘寒去りやらぬ三月三日、磯部先生をお迎えして大町中村樣宅で例會を催す。世相は道義の國たる面目を要はしめるものが多々あるが、道義日本の確立こそ宗教への展開をなすものであらふ。生死の大事にあつても即業業と悟り超出することの出來る者は幸ひであり、且讃に說んで御奉公の出來る人である等、唱題せる現在の心超みに就いて樣々な法話を頂く。畢竟本佛の慈光を仰ぎつゝ妙法の受持以外に我等の魂の永く生くべき道はないことを居よ。

統一定價

一部 金二十錢 送料二錢
半ヶ年 金一圓二十錢
一ヶ年 金二圓二十錢 （送料共）

昭和十九年三月二十七日 印刷納本
昭和十九年四月一日 發行

東京都小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人 磯部滿事
東京都四谷區內藤町一
印刷人 山田英二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所 東東二〇五二

東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法人 統一團 電話牛込五三三六番 振替東京九四二〇番

東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社